

女優・歌手
宝塚歌劇団元トップスター

望海 風斗さん

宝塚歌劇団元トップスターであり、舞台をはじめ、大河ドラマのご出演等、幅広く活躍されている望海風斗さんのインタビューをお届けします。2025年度第33回読売演劇大賞では「大賞」を受賞され、その演技が高い評価を受けた話題作、『マスタークラス』や『エリザベート』などのお話を伺いながら、演劇に対する熱意と深い思索を伺うことができました。

聞き手・構成：安田 愛鈴、富田 寛之



——主演のミュージカル『エリザベート』*1（以下、宝塚歌劇団における同演目と対比して「東宝版」として言及されます）、主演のエリザベート役としてのご出演、本当にお疲れ様でした。演劇界において大きな注目を集めている作品の一つであると思いますが、ご出演をすることが決まった際のお気持ちをお聞かせください。

まずは信じられないという気持ちが強かったです。元々自分の人生において色々な役に挑戦してみたいという思いはありましたが、“エリザベート”という役が自分には持っていないものだと思っていましたので、まさか自分が挑戦できるチャンスがあるなんてという嬉しい気持ちと、信じられない気持ちがありました。

——“自分にはないもの”と感じていた役は演じていく中で、最終的にはどのような存在になりましたか。

私が元々考えていた“エリザベート”は、宝塚版の印象が強く、あのように可憐で可愛らしい人物は絶対にできないのではないかと感じていました。

そうした中で、お稽古の直前にウィーンとドイツへ行き、エリザベートが生きてきた場所を少しですが実際に辿ることができました。その土地を見たり、資料を読んだりする中で、それまで自分が思っていたエリザベート像が少し広がったというか、より柔軟に捉え

られるようになっていったと感じています。

最初は凄く昔の人で、自分とは遠い存在だと思っていたのですが、意外と時代的にもそこまで遠くなく、むしろ今の私たちに近い感覚を持った人なのではないかと思うようになりました。もし今の時代に生きていたら、共感できる人も沢山いたのではないかと思いますし、当時は時代の中で共感されにくかっただけで、本当に一人の人間として、生きづらさを抱えながらもしっかり生きて人だったのではないかと感じました。そう考えたことで、エリザベートとの距離がグッと近くなり、比較的近い存在として役に入っていくことができたのは大きかったと思います。

——エリザベート役として、宝塚時代からの同期である明日海りお様とダブルキャストでご出演されましたが、どのような思いがありましたか。

まず、音楽学校から一緒にやってきた同期でダブルキャストということが、本当にいいのかということ、正直最初は思いました。

でも、2人で、『エリザベート』を作れるということは本当に心強い存在であったので、もう稽古中からとにかく2人で手を取り合いながら、色々なことを乗り越えてきました。あと皆さん、トート役を含め色々な

*1：ミュージカル『エリザベート』とは ハプスブルク帝国最後の皇后エリザベートと、彼女を愛した黄泉の帝王“トート＝死”。トートはエリザベートが少女の頃から彼女の愛を求め続け、彼女もいつしかトートの愛を意識するようになる。（中略）滅亡の帳がおりる帝国と共にエリザベートに“運命の日”が訪れる。——ミュージカル『エリザベート』公式ホームページより（<https://www.tohostage.com/elisabeth/story.html>）。

役の方が、何年もやられている方が多い中で、主役が2人とも初めてという状態でしたので、明日海が存在が心強かったですし、そのときはもう本当に同期でよかったなと思いました。

——印象に残るシーンを教えてください。

公演中もずっとエリザベートとフランツ（※「フランツ・ヨーゼフ」、皇帝であり皇后エリザベートの夫）との物語が非常に大切だということを感じていましたので、フランツとの『夜のポート』という楽曲は、印象深く感じていました。見ていた時と実際にやってみてからとでは、『夜のポート』の印象がすごく変わりました。元々聴いていてもすごくいい曲だと思っていたのですが、これは歌ってみないとわからないというか、本当にフランツとシシィ（※エリザベートの愛称）にしかならない2人のデュエットであり、誰にも理解できないであろう2人の絆というか、愛の話であることを強く感じました。

——人の心に残る歌を届けるために、何か意識していることはありますか。

歌に対しては宝塚時代から、どうやったら人の心に残る歌が歌えるかということとずっと考えて取り組んでいました。以前『ファントム』という作品で、作曲家のモーリー・イェストンさんが劇団に来てくださったときに、「歌は役、キャラクターの秘密をお客様に打ち明けるもの」ということを教えてくださいまして、それがすごく心に残っています。歌をきれいに歌うとか、うまく歌うことではなくて、ミュージカルにおいての歌は、お客様にだけ教える、感情をさらけ出すことであり、それをどれくらいお客様にさらけ出すことができるかということが大事だと思って、そういう曲のときは、その日感じていることをもうすべてさらけ出して、歌うということを意識しています。

——2025年度第33回読売演劇大賞、最優秀女優賞（※インタビュー時）受賞、誠にありがとうございます。

ありがとうございます。

——受賞のお知らせを聞いたときのお気持ちをお聞かせいただけますか。

まず女優賞の優秀賞に選ばれた時点ですごく嬉し

かったです。『マスタークラス』と『エリザベート』の2作品で選ばれたということで、特に『マスタークラス』は本当に大変な作品でもありましたが、でもあの作品がなかったら、今回このような『エリザベート』はできなかったと思いますし、2025年の大きな2つの山を乗り越えた自分に対しての、すごく励みになる賞だと感じました。

そして最優秀女優賞をいただいたときは、賞の重さを感じました。何かこの先自分が壁にぶつかる時や前が見えなくなる時には、いつも振り返って思い出せる、支えのような存在になるのではないかと感じています。

そして本当に周りの方に感謝ですね。この賞をいただいたことで、『マスタークラス』、『エリザベート』という作品がもっと多くの方に知っていただいて、再演をやるときに見てみたいと思う方が、増えたら嬉しいなと思っています。

——『マスタークラス』では、ストレートプレイ（※台詞と演技のみで物語を展開する演劇の形態）の演目が初めてだったということですが、ストレートプレイならではの難しさというものはどこにありましたか。

“歌がない”ということが一番難しいところですね。音楽が助けてくれないというか、ミュージカルは音楽で、その役の感情を打ち明けられるので、お客様にとっても、割と分かりやすいと思います。それに比べてお芝居だけだと歌がないので、そこが全部説明の言葉になってしまうというか、言葉をどう伝えていくかということが、とても大事になります。

演出家の森新太郎さんもすごく情熱をもって作品に挑まれる方で、稽古中はとにかくその足を休ませるなど、芝居において足が休んでいると何回も言われました。芝居のリズム感というものを、いつもミュージカルでは音楽に助けられていたものを、それを自分たちで作っていかねければならず、そのリズム感をとにかく休まず作れと言われてまして、それが慣れるまではすごく大変でした。

——『マスタークラス』では、マリア・カラスという世界的歌姫を演じられました。どのような印象を持たれましたか。

マリア・カラスのすごいところって、歌だけじゃなくて、その作品の中でその人物がどれだけ生きてるかっていうことをやりぬいた人だから、それは本当にすごい

など。台詞にも役を生きることについての話がちりばめられていました。そういうことを戦い抜いたからこそいろいろな言葉に説得力があるんだなと思って、台詞が実感を持って言えるように何回も色んなことを試してみたりしました。

彼女の台詞がエリザベートをやる上で、凄く勇気を与えてくれたと思っています。

——宝塚歌劇団を志したきっかけをお教えてください。

叔母が宝塚を大好きだったことと、私もバレエやピアノ、歌うこともすごく好きだったので、いつかはそのような表現ができるところには行きたいなと、ぼんやり子供の時から思っていました。叔母が私を宝塚に連れていってくれた際に、天海祐希さんを見て、もう本当にかっこいいなというか、恋に落ちて、天海祐希さんと同じ舞台上に立ちたいと思ったところから、宝塚を目指すようになりました。

——その後宝塚歌劇団に入団し、雪組のトップスターに就任されました。宝塚歌劇団にいたからこそ身につけることができた力を教えてください。

舞台上に立ったときに、もし何かが起きても、とにかく出たら何とかするとか、力づくでも何とかしてやる、みたいな感覚は、宝塚時代に培ったものだと思います。いろいろな壁にぶつかって、本当に初日大丈夫なんだろうかと思うこともありました。いざ舞台上に立つと「何とかしなきゃ」という気持ちが自然と出てくるというか、そういう勝負師のような感覚は、宝塚での経験の中で身につけていったものだと感じています。

また、舞台は一人で作るものではなく、みんなで助け合いながら作っていくものということも、劇団で強く学びました。誰かにピンチが訪れたときに、とっさにどう助けるか、どうすれば舞台を止めずに、お客様にできるだけ違和感なく届けられるかを瞬時に考える力は、劇団で培った大きな力だと思います。

——トップスターという存在は、責任が重大であったり、作品全体を見る必要があったりなど、ご苦労があったと思います。

トップになって感じたのは、自分のことを考える時間がないぐらい忙しいということです。作品のことがあったり、皆のことを考えている時間の方が長かった

し、その方が組にとってもいいということは感じていました。

あとは、いかにみんなが気持ちよく舞台上に挑めるかとか、失敗を恐れず挑戦できるかということは、すごく意識をしていました。稽古場では、自分自身も悩みながら役に向き合っている姿を見てもらうことで、「トップでもこんなに悔しがらんだ」とか、「苦労をするんだ」と感じてもらえたらいいなと思って。だからこそ、失敗を恐れずに、色々なことに挑戦してほしいという気持ちがありましたし、そういう雰囲気や空気をつくることは、特に大切にしていました。

それから、トップになると、本当にみんなが自分のことを見てくれるんだなというのを強く感じました。自分がどう動くかを見て、感じて、一緒に進んでくれるんだと実感したからこそ、私は走り続けるしかないなと思っていました。舞台が始まったら公演に集中して、毎回いいものを届けること、相手役の真彩（※真彩希帆さん）と一緒に全力で走ることを大切にしていました。その姿を見て、皆がついてきてくれて、生きのいい舞台をお届けできるような、わくわくした状態を常につくってほしいなと思ってやっていたように思います。

——俳優としてのご経歴の中で、影響を受けた方の存在はありますか。

沢山いらっしゃるのですが、天海祐希さんの存在は本当に大きいですね。天海祐希さんがいなかったら宝塚にも入っていなかったかもしれないですし、映像も舞台でも活躍されていて、舞台を拝見しに行く度に、もっと自分も頑張らなければと、いつも背筋が伸びるといふか、そういう気持ちにさせていただけの方です。特別何かを教わっているからということではないのですが、心の中での師匠のように思っています。

でも、本当に宝塚では沢山の方々にお世話になって、皆さんから頂いた言葉とか、見せていただく仕事への姿勢みたいなものが、今の自分を作っていると感じるので、本当に先輩方には感謝しています。

——これまでのご経験の中で特に印象に残っている嬉しい出来事をあげるとすれば、どのような瞬間でしょうか。

一つ挙げるとすれば、宝塚の時の退団公演の東京の千秋楽ですね。コロナ禍だったこともあり、公演ができるかどうかハラハラの中でした。オーケストラも

なしにしたり、出演者も下級生が半分ずつに分けられて、舞台上に立てる人数も減らされたりなど、全員で舞台に立てなくても、舞台をやるためにはもうそれしかないという状況でした。舞台をストップさせずにやらなきゃいけないという緊張感と、皆で舞台に立てないという悔しさと、色々な思いがある中で、最後、千秋楽の『サヨナラショー』で、全員で舞台に立つことができ、寂しい気持ちもありましたが、まだ先が見えない時期にみんなでやりきって、千秋楽まで完走できたということがすごく嬉しかったです。

—— 逆に最も困難だったと感じられる時期についてもお聞かせいただけますか。

今一番思いつくのは、花組時代（※雪組でのトップスター就任前）、蘭寿とむさんがトップでいらっしゃって、これから先、花組がどうなっていくかとか、自分がトップになれるかどうかということを考える時期が、すごくもがいた時期かなと思います。その時に本当に色々な方に背中を押していただいたり、小池先生（※演出家の小池修一郎氏）にも沢山厳しく指導していただいたりなど、自分が上げられるように、本当に周りのの方がずっとプッシュして下さっている中で、なかなか上手く登りきれないというような、もどかしさを感じる時期がありました。ファンの方もきつともどかしかったと思いますし、私の中でも、この先どうしていったらいいんだろうと考える時期でもありました。でも、その時期があるからこそ、トップになれた時の気持ちもすごく忘れられないですし、今でも振り返ると、あの時期は本当に皆さんに助けていただいたと感じます。

—— 過去のご自身に一言かけられるとしたら、どの時代の望海様にどのような言葉をかけたいですか。

劇団に入ったばかりの自分に、ダンスのレッスンを頑張りなさいと（笑）、ダンスと日舞のレッスンはきちんと受けなさいと言ってあげたいです。歌に集中して頑張ってきた部分もありますが、今思えば、苦手なことってちょっと逃げがちで、そこは下級生の時に頑張れば続けることもできただろうと思います。

—— 今後俳優としてどのような挑戦をしていきたいですか。

宝塚時代や、卒業してからいただく役は、強く生きていく役が多くて、私もそういう役がすごく好きで、

どんな苦難でも、どう乗り越えていくかみたいな、人間の底力みたいなものを表現することが好きなのですが、逆にすごく弱々しいというか、そういう人も演じてみたいとも思います。どんなものでもできるようにという気持ちはまだまだあるので、こういう風になっていきたいというのは明確にはないのですが、こんな弱々しい役もやるんだという意外性も持ちたいと思います。

—— 弁護士という職業について、率直にどのような印象を持っていますか。

元々は怖いではないですけども、きっちりされているのかなというイメージがありました。一方でテレビでも出ていらっしゃるりとかするのを見て、少し印象が変わった部分もありますし、割と宝塚が好きの方も沢山いらっしゃって、お会いした際に意外と、そういうファンタジーみたいなものも楽しんでくださるんだなと思い、それで一気に印象が変わりました。

—— 『LIBRA』の読者に一言いただけますか。

ミュージカルは、本当にお好きな方にとっては身近なものだと思うのですが、初めての方にとってはなかなか一歩踏み出すのが難しいものでもあるのかなと思います。でも、リアルな世界の中に歌やダンス、音楽といった非日常が加わることで、ちょっとした逃避行のような感覚を味わっていただけるものでもあると思っています。『エリザベート』のような作品であれば、時代を越えて別の場所に行けたり、現実とは違う世界に触れたりしながらも、自分の人生に重なるような大切なメッセージを受け取っていただけるのではないかと思います。ミュージカルは、日常から少し離れて、でもすごく身近なところでそうした体験ができる場所だと思っていますので、ぜひ劇場に足を運んでいただいて、少しだけ現実を忘れていただけたら嬉しいです。

プロフィール のぞみ・ふうと

1983年神奈川県横浜市生まれ。2001年宝塚音楽学校入学、2017年雪組トップスター就任、2021年4月退団。以降、舞台を中心に活動の幅を広げている。主な出演作品に、ミュージカル『next to normal』『ガイズ&ドールズ』（2022年度 第30回読売演劇大賞優秀女優賞受賞）、『DREAMGIRLS』（2023、日本初演）（2023年第48回菊田一夫演劇賞受賞）、『ムーン・ルージュ!ザ・ミュージカル』（2023・2024）『マスタークラス』『エリザベート』の成果により、2025年度 第33回読売演劇大賞「大賞」と「最優秀女優賞」を、さらに令和7年度（第76回）文化庁芸術選奨「文部科学大臣新人賞」を受賞。